



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

# OVERSEAS

## Republic of Palau

— パラオ共和国 —

### 海外事情



## パラオ生活体験記 — 島に息づく文化と、ゆったり流れる時間の中で



**玉岡 秀敏** TAMAOKA Hidetoshi  
パシフィックコンサルタンツ株式会社  
国際営業部長

パラオに降り立つのは、たいいてい深夜。昼間の暑さはないものの、体にまとわりつく、ねっとりした湿った空気に包まれ「また来たな」と思いながら、それほどエアコンの効いていない車で「ただいま」と、ホテルに向かう。他の多くの国で感じる空港出口の喧騒と歓迎とはまた違った不愛想な歓迎の気配に心地よさを感じる、そんなところ。

翌朝、目が覚めるとパラオの温かく自然体で接してくれる人々と生活が始まる。人々の根底には、

海と共に、海のおかげで生き、そして戦ってきた歴史がある。決して豊かでない、厳しい自然環境の生活では、家族を重んじ、島全体がファミリーのように生活をする必要があったのだろう。

こうした感覚には、パラオという国そのものの成り立ちや環境が大きく関係している。

### パラオ共和国

パラオ共和国 (Republic of Palau) は、西太平洋に位置する小さな島

嶼国家で、300以上の島々から構成される。ミクロネシアの一部を成し、フィリピンの東、グアムの南西に広がる独自の文化圏を持つ。最大の島であるバベルダオブ島を中心に、火山島と隆起サンゴ礁島が混在し、周囲には透明度の高い海と広大なラグーン、そして世界的にも評価の高いバリアリーフが広がっている。

気候は年間を通して高温多湿で、豊かな降雨量により多様な熱帯植生が育まれ、海洋生態系も極



写真1 島を囲むバリアリーフ (上空より撮影)



写真2 戦時はすべてが焼け野原だったとは思えない原生林 (ペリリュウ島)



写真3 伝統的な集会所 (バイ) 部族の長老などが集まり会議をした



写真4 地元の伝統的なお弁当

めて豊かである。人口は1.8万人ほどで、経済・生活の中心は隣接するコロール島に集中している。

パラオは歴史的にスペイン、ドイツ、日本、アメリカといった複数の統治を受け、これらの文化的影響が建築、食文化、価値観に独自の形で混ざり合っている。そして、今でも日本統治時代の名残は、建築物にも文化や言葉にも多く感じられる。

ベンジョ、ダイジョウブ、デンキバシラ (電柱) など日本語も残されており、お酒を飲む時には、「ツカレナオス」と言って乾杯する。名前にも“マツタロウさん”、“ヤマンガチさん”など、日本人の名前を取って名付けられた方が多く存在する。

### パラオに暮らす日本人

パラオが親日的であるということを目にしたことがある人は多いと思う。第一次世界大戦後、国際連盟の委任統治領として日本が統

治し、学校教育、医療制度の導入、道路、港湾や上下水道などのインフラもこの時代に多く整備され、パラオ人と日本人は日常的に共存していたという。日本人の押し付け型の支配でなく、共存型の支配であった記憶などが、良好な関係につながっているとも言われている。

現在は250～300人ほどの日本人が住んでいるという。この人たちは現地になじみ、信用されており、我々のような訪問者が現地でパラオ人と共存して生活するうえで、大きな役割を果たしてくれていると感じる。

### 文化と伝統の中に生きる人々

パラオ文化の中心には、自然への深い敬意があり、生態系の調和を重んじ、必要以上に自然資源を採取しないという価値観を有しており、人々の生活にも溶け込んでいる。

母方の家系を通じて土地や血族

の継承が行われ、集落ごとに「バイ」と呼ばれる伝統的な集会所が存在し、ここは村の意思決定や祭礼の場として役割を果たしてきた。

政治において近代国家としての国・州単位の統治、一方で、酋長制度のような伝統的な体制の二重構造での統治が行われている。これは良くも悪くも現代政治に影響を及ぼしている。従来の家族の絆が残されると同時に、近代的な制度やルールへの変更は難航することも多いようだ。

### 島での生活リズム

島の生活リズムは、いわゆる“パラオタイム”で物事が進み、約束の時間に多少遅れても誰も焦った様子を見せない。しかし、日本人とのミーティングでは時間を守り、多くの日本留学経験者は時間を守る。こういった面でも日本人の文化を感じることも多い。

## 食文化

パラオの食文化は自然の恵みを中心に発展してきた。レモンとココナッツミルクで和えた魚料理、焼きバナナやバナナの葉に包んで蒸したタロイモなど、素朴ながらも素材の味を生かした料理が多い。しかし最近では、伝統的な料理は日常にはあまり見られなくなり、輸入食品への依存度が高まっている。食料自給率は10～15%程度とも言われており、食費が家計支出の約3分の1を占めるようになるなど、現代的な生活様式が浸透している。

海面上昇による塩害が食料生産にも影響を与えているとも言われており、生活インフラへの影響も出始めている。我々のようなエンジニアが果たすべき役割も今後一層重要になるだろうと感じるところでもある。

## パラオの人々の自然観と見据える未来観

このような食料環境でも、排他的経済水域の約80%を“サンクチュアリ（海洋保護区）”として商業漁業等を禁止している。

こうしたスタンスは、経済発展



写真5 地元で採れた野菜や手作りの郷土料理を公園で販売する様子 コミュニティの一つにもなっている

には不利な立地や乏しい資源によって産業発展が進まない小国というのではなく、あえてそのポジションを選ぶことでアイデンティティを保ち、世界に対して、また未来を生きる人たちへのメッセージを発信しているのでは、と思うところでもある。

## 訪問者の島での生活

訪問者の島での生活は、輸入品を購入し、自炊をすることが多い。



写真6 水揚げされるマグロ

外食においても和洋食、中華と幅広い選択が可能だが、外食は高価で、野菜なども不足しがちである。購入可能な生鮮食品は限られているが、日本から持ち込む調味料、缶詰や乾燥食材が活躍してくれる。多くはないがマグロなども水揚げされており、刺身を食べられる。地元で製造されている地ビールと共に、たまのご褒美として楽しんでいる。

休日は、海に出ることもあるが、



写真7 ボートから眺めるパラオの海



写真8 ダイビングで出会えるマンタ



写真9 熱帯雨林の中から突如現れるガラツマオの滝



写真10 夕日を眺めながら憩いの時間

実は本土にはほとんどビーチがない。人工的に作られた遊泳エリアで海に入ることはできるが、海に出る機会は案外少ない。多くの人々がイメージするきれいな海は、ボートに乗って訪れる島や、ボートからのシュノーケリングやダイビングによって体験できる。もちろん、海の美しさやダイビングで見られる魚は、さすが世界の三大ダイビングスポットと言われるとおりである。

また、自然そのものの熱帯雨林のトレッキングや突如現れる滝などもなかなかの見ごたえである。

気温は暑くても32℃程度、最低気温も20℃程度で安定しており、日本の夏と比べると圧倒的に過ごしやすい。日なたは日差しが強く暑いですが、日陰に入ると涼しくとても過ごしやすい。オフィス内では効きすぎたエアコンが寒くてつらい、という南国あるあるの状況だ。

もちろんWi-Fiは普通に使い、NHKも見られる。日本をはじめとしたさまざまな情報も手軽に得られ、なんの問題もない。一度、海底ケーブルの損傷があったとのこと、で10日間ほど通信ができなくなっ

たことがあり、勝手に“ざわざわ”してしまったが大きな問題もなく、「案外大丈夫なもんだな」と思うこともあった。

## 生活を通して感じたパラオの魅力

パラオで暮らしてみても強く感じるのは、誰もが自然と共に、島全体がファミリーとして生きているということだ。子供や年配の方への思いやりは、まちの中でも日常に見られ、道路を渡る際には自動車はすぐに一時停止してくれる。

まちを歩いていると顔見知りになった現地の人は「どこに行くんだ、乗るか?」と声をかけてくれる。この一体感は、長い歴史において培われた島で生き続けるための知恵であり文化そのものでもある。ちなみにパラオには住所がなく「どこどこ集落」の「誰々さん」で通じる、そんなムラなのだ。

パラオでの生活は、キラキラした観光イメージとは異なり、海と森に寄り添う静かな日常の積み重ねである。しかし、その穏やかさこそが、この島の一番の魅力なのだと思うようになった。

## 終わりに

パラオへの頻繁な出張は、私にとって単なる業務ではなく、「文化に織り込まれながら働き、生活する」という貴重な経験になっている。

効率性が優先される現代のビジネス社会で、パラオが改めて教えてくれる「余白の価値」や「海や森に対する畏敬の念と共存する姿」は、同時に我々の仕事に対する逆説的な提案となることもある。「本当にそれが必要なのか」と。

パラオの人々が海と森を敬い、家族や仲間とのつながりを大切にしながら生きる姿は、今をどう生き、未来に何を残すのか、無言の主張を続けているようにも感じる。それは、考えすぎかもしれない。しかし、私にとっては世界の中でも最小人口国の一つであるパラオが世界に向けて発信している声には、耳を傾ける価値があるのでは、と感じている。

これからもこの島を訪れるたび、パラオの文化に敬意を払いつつ、エンジニアとしての足跡を残せればと思っている。